

権田金属工業

本年度月販量2割増へ

コロナ前水準に需要回復

太物黄銅棒、銅プスバーなどを生産する権田金属工業(相模原市中央区、権田源太郎社長)は2021年度の月間販売量を前年より約2割多い3300トと見込む。黄銅棒、銅棒、めっき用銅ボールの需要が復調し、販売量は新型コロナウイルス禍前の水準に戻りつつある。

権田社長は「年間を通じて足元の回復基調が続くのではないかと」の見方を示す。

前期の販売量は前々期に比べて1割減。4月頃から新型コロナウイルス禍で販売量が減少し始

め、最も落ち込んだ6月頃から9月頃には「約2割減の月平均290ト前後まで減っ

た(権田社長)。しかし、11月頃から重電や一般機械向け需要を中心に徐々に回復した。足元もプスバーは低位安定の状況が続くものの、黄銅棒などは復調している。権田社長は「活況ではないものの、全般的に底堅い回復をみせている」と話す。耐震用建材などへの用途開発を進めるマグネ製品については

「需要環境から量産は中止しているが、研究開発は引き続き積極的に取り組む考えだ」(同)。

権田金属工業はドロローベンチを更新する。8月に半月程度かけて行う予定。更新工事中

ドロローベンチ8月更新

は銅棒、黄銅棒の生産ラインを停止するた

め、供給に影響が出ないよう約2カ月前から

造りだめする方針だ。権田社長は「設備更新で棒材を引き伸ばす力が10%程度向上し、生

産量の増加が見込める」と話す。

既存設備の老朽化に対応するのが目的で、国内メーカー製のドロローベンチ1台を導入する。更新前に造りだめを実施するため原料の受け入れ量を増やしており、「工事を8月には段階的に減らす方針だ」(権田社長)。